

通信使研究の現況と課題

張舜順

1. はじめに
2. 通信使の範囲と性格規定
3. 韓国における通信使研究
 - 1) 朝鮮前期通信使研究
 - 2) 朝鮮後期通信使研究
 - 対日外交体制
 - 外交使節
 - 経済(貿易)と倭館
 - 文化交流
 - 相互認識
 - 文学
 - 記録類
 - その他
4. 通信使研究の課題と展望-むすびに代えて

1. はじめに

通信使の往来は、両国の中央政府(朝鮮国王⇄幕府将軍)間で行われた直接の交流であったため、それが持つ関係や意義は両国の政治・経済・文化及び相互認識等ほとんどすべての分野にわたっている。このような点から通信使の往来による両国の交聘は朝鮮時代の韓日関係を理解する上で重要な主題の一つであるといえよう。

にもかかわらず、わが国においての通信使についての研究は日本と比べてみたとき、量的な面だけを見ても、未だ微々たる水準と言える¹。このような研究の差異は通信使がどちらか一方の国の

¹ 孫承喆によれば、日本において通信使関連研究論文が韓国の10倍以上発表されているという。(「朝鮮時代通信

立場を強調するものではなく、韓日両国がともに演じた国際的行為であっただけに、両国の立場が冷静かつ写實的に、そして相互補完的な立場から扱わねばならぬものであるにもかかわらず、日本中心の視点を一般化してしまうという問題点を抱えている。

本稿ではこのような点を念頭に置き、この間、韓国側においてなされてきた研究の現況を相対的に検証し、これからの課題と展望を検討しようと思う。論議の範囲は地域としては韓国に限られるが、韓国において発表された外国人の研究も含まれる。それらは外国人の研究と言ってもなお韓国における研究成果を反映したものであるためである。

2. 通信使の範囲と性格規定

通信使とは朝鮮時代、朝鮮国王の名義で日本の最高統治者である幕府将軍(足利、徳川幕府)のもとへ送られた公式な外交使節であり、幕府将軍への慶賀や弔問、その他両国間の緊急な懸案事項を解決するために派遣された使節のことである。かれらは朝鮮国王の国書と禮単を持参する三人の中央官吏をはじめ、総数470～500名余りによって編成されていた²。

通信使が日本に派遣された時期は朝鮮時代の全時期に該当し、日本では室町時代の初期から戦国時代を経て江戸時代に該当する時期である。また、その性格や形態は両国独自の政治のあり方と、広くは東アジアの国際的様相を反映しており、かつ極めて多様であるため、画一的な類型化は難しい面もある。だが、正使の朴瑞生、副使の李藝、書状官の金克柔を三使とする使節をもって通信使の名称で初めて日本に派遣された1429年(世宗11年)の通信使一行によれば、以下のような条件と目的を備えていなければならないとされる。一、朝鮮国王から日本国王(幕府将軍)のもとへ派遣される。二、日本国王の吉凶または両国間の緊急課題を解決するという目的を持っている。三、朝鮮国王が日本国王へ送る国書と禮単を持参する。四、使節団は中央高位官吏である三使以下によって編成される。五、国王使の称号を持つ³。

朝鮮前期、通信使の名称で日本に派遣された使節は1413年(太宗13年)、1429年(世宗11年)、1439年(世宗21年)、1443年(世宗25年)、1460年(世祖5年)、1479年(成宗10年)、1590年(宣祖23年)、1596年(宣祖29年)の計8回ほど試みられた。だが、使節の発病と日本側の国内事情により、1413年、1460年、1479年の使節派遣は実行されず、1429年、1439年、1443年、1590年、1596年の5度の使節派遣だけが施行されている⁴。そして、壬辰倭乱の勃発により両国の国交が断絶し、通信使の往

使研究の回顧と展望』『韓日関係史研究』16、2002年、53-54頁

² 通信使概観については前掲、孫承喆「朝鮮時代通信使研究の回顧と展望』『韓日関係史研究』16 42-47頁によく整理されている。

³ 三宅英利『近世アジアの日本と朝鮮半島』朝日新聞社、1993年(韓国語版の42頁)を参照

⁴ 李鉉淙は『朝鮮前期對日交渉史研究』韓国研究院、1964年で、朝鮮から日本に派遣された使臣は全て通信使としている。孫承喆と三宅英利は朝鮮前期に朝鮮使節の日本派遣は計18回に及んだが、通信使の称号で将軍のもとまで行ったのが8回(1428年・1439年・1443年・1460年・1475年・1479年・1590年・1596年)に及ぶとし、通信使の回

来も自然と中断されるしかなかったのである。

通信使が再び登場することとなったのは壬辰倭乱が終息した後、新たに日本の政権を掌握した徳川幕府初期でのことだ。壬辰倭乱により断絶した両国の講和交渉は朝鮮と徳川幕府、対馬島の実利がかかっていたため、意外と早く進み、戦争が終わった数年後の1604年(善祖37年)に僧侶の惟政と孫文或が探賊使として対馬を経て京都に赴くことで始められた。徳川家康と徳川秀忠と会った通信使は日本の国情を視察して帰国した。一方、朝鮮政府は朝鮮側から提示した徳川将軍の国書と犯陵賊の召喚という条件が履行されるや、1607年には正使の呂祐吉一行を回答兼刷還使として江戸に派遣したのだが、それが朝鮮後期における通信使派遣の始まりである。また、その2年後の1609年(光海君1年)には両国間の国交正常化条約である己酉約條が締結され、1611年には歳遣船が正式に渡航してくることで、はじめて両国間の外交関係と交易が公式に回復したのである⁵。1607年から施行された朝鮮後期通信使は12回派遣されている。だが、壬辰倭乱直後の1607年、1617年、1624年に派遣された使節の正式名称は‘回答兼刷還使’であった。したがって、使節の公式名称が‘回答兼刷還使’であり、新たな外交体制が確立されていなかった過度期的な段階で派遣されたという点を挙げて、一般の通信使とは区別するべきだと⁶、はじめからそれらを通信使の範疇から除くことを⁷、主張するむきもある⁸。実際、当時も‘回答兼刷還使の派遣の是非と名称について朝廷においても多くの論議が重ねられた。日本においては和議を結ぶ交隣使節と

数を8回としている。(前掲 孫承詒「朝鮮時代通信使研究の回顧と展望」34頁、三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、1986年)。だが、実際には1460年・1475年・1590年の使節は正使の発病や遭難事故などにより実行に移せなかったため、朝鮮前期の通信使の日本派遣回数は5回だと言える。

⁵ 壬辰倭乱以後、国交再開のための朝日両国の講和使節の往来および交渉過程については、孫承詒「壬辰以後の中華的交隣体制の復活」『朝鮮時代韓日関係史研究』知性の泉、1994年によく整理されている。

⁶ 河宇鳳「壬辰以後の釜山と日本関係」『港都釜山』9、釜山直轄市史編纂委員会、1992年、85頁

⁷ 李元淳「朝鮮通信使の正しい理解」申成淳・李根成著『朝鮮通信使』中央日報社、1994年

洪性徳「十七世紀朝・日外交使行研究」全北大学校博士論文、1998年、97-99頁

洪性徳「通信使は信義の象徴か、朝貢の象徴か」『韓国と日本—歪曲とコンプレックスの歴史』2、白樺、1998年

⁸ もちろん、回答兼刷還使を通信使の範疇に入れ、把握している研究者もいる。その代表的な例が、三宅英利と中村栄孝である。中村栄孝は朝鮮後期の朝日関係の展開のあり様を1607年の回答使派遣と、1609年の己酉約條の締結を起点とし、それ以後大きな変化なしに一貫してとらえている。すなわち、1607年の回答兼刷還使の派遣を‘交隣関係の復旧’として、己酉約條締結を‘交隣体制の更新’として説明している。一方、通信使についても初期における3度の回答兼刷還使と、その後の9度の通信使を含め、計12度にわたる通信使派遣として把握している。(中村栄孝「江戸時代の日鮮関係」『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、1969年)。

三宅英利は通信使制の変化にもなう時期区分を試みている。彼は朝鮮後期(江戸時代)の通信使に対し①幕藩体制確立期の通信使(3次にわたる回答兼刷還使) ②幕藩体制安定期の通信使(1636年、1643年、1655年、1682年の使行) ③新井白石の制度改変と通信使(1711年の使行) ④幕藩体制展開期の通信使(1719年、1748年、1763年の使行) ⑤幕藩体制動揺期の通信使(1811年の使行)とに分けている(三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、1986年)。彼の研究は通信使について注目される成果を多く示している。特に通信使の実際の目的を明らかにした点と時期区分、概念定義の提示などは、通信使研究の水準を一段階高めたものと評価できる。だが、時期区分の基準は日本国内の政情変化に焦点を当てているため、客観的な理解の枠として適当でない面もある。

して‘通信使’の派遣を要請したが、当時の朝鮮としては感情的にも受け入れがたく、日本内の徳川幕府の将来性に対する疑問も依然として存在していた時なので、日本の要求をそのまま受け入れることはできなかった。結局、1607年の使節に対する名称を定める過程で、朝廷では‘通諭使’‘回答使’‘通信使’等々、論議が白熱したが⁹、結局は国交再開を要請する幕府將軍の国書に回答するという名分とともに戦時に捕らわれていった捕虜の送還という任務を加え‘回答兼刷還使’としたのである¹⁰。

国交再開後の通信使派遣(1607年、1617年、1624年)、すなわち回答兼刷還使の派遣は、日本としては徳川幕府の国際的威容の誇示と国内の大名に対する支配強化等、幕藩体制の存立に通信使を活用する等の政治的意図を含んだ実利外交の結果であつたらならば、朝鮮としては初期の3度の通信使を‘回答兼刷還使’と改称することで、国交再開のための名分と戦争捕虜送還という実利をともに得ようという目的があつたのである。すなわち、当時朝鮮の国家的な名分からは、たとえば、使節が通信使の性格を持っていたとしても、その名称は通信使ではない‘回答兼刷還使’としての派遣だけが可能だったのだ。それ以後、このような性格を持つ回答兼刷還使は1617年と1624年、二度派遣されている。だが、回答兼刷還使の使節団編成や旅程が通信使と似ているだけでなく、『朝鮮王朝実録』『通信使謄録』『増正交隣志』『通文館志』等、朝鮮政府の記録や使節派遣に参加した使節たちの記録を見れば、当時の人々も初期‘回答兼刷還使’を朝鮮前期の通信使と同じものと理解している¹¹。その一方、第二次、第三次の回答兼刷還使の機能が第一次に比べ、はっきりと低下している点や、朝鮮後期では初めて通信使という名称で日本に行った1636年の使節派遣の場合も国際的には明中心の冊封体制が崩壊し、朝鮮と日本の両国がともに国内的に大きな変化を蒙った状況の下で、中国大陸での急激な情勢変化に適応するための外交政策の結果だという点を勘案するなら、初期の回答兼刷還使と通信使はその性格においてこれといった差異がない。

通信使派遣が定例化した後、通信使の派遣目的は表面的には大部分が‘將軍襲職への祝賀’であつた。だが、内部的にはその時々、初期の通信使(回答兼刷還使)と同じく政治的な目的があつた。例えば、1636年はもちろん、1643年は清の圧力に対する牽制と兼帯制度と島原の乱に関する国政探索、1655年の通信使は、日本が‘仮道朝鮮’構想をもっているとの情報の真偽を確認するためであつたし、1682年は対馬との貿易統制のための7ヶ条の朝市約定などが懸案としてあつた。すなわち、清国を中心として再び東北アジアが均衡を回復する17世紀後半まで、通信使は回答兼刷還使のような政治使節の性格を持っていたのである。したがって、初期の回答兼刷還使と通信使は朝鮮後期の通信使とともに理解するべきであろう。だが、18世紀に入り、通信使は両国の外交的な懸案事項の解決よりは將軍襲職祝賀として儀礼化し、政治使節から文化使節へとその性格が転換していった。

⁹ 『宣祖実録』39年8月23日己未。

¹⁰ 『宣祖実録』40年1月5日己巳。

¹¹ 『光海君日記』2年3月6日壬午、14年1月22日戊午。1607年の第1次回答兼刷還使の隨行文官の蔣希春は彼の使行録『海東記』に自ら‘三信使’と記載している。

1811年以後、通信使の旅程を変更し、対馬において易地通信を行なうようになった。それは通信使の派遣が両国どちらにも有益とされない局面が作り出されたためであった。朝鮮政府としては始めから政治的、経済的に負担の大きな行事であったし、徳川幕府も支配体制を確立した以上、通信使の力を借りて幕府の権威を高める状況でもなかった。また、両国を仲介する対馬の立場においても、経済的実益よりは損失が増えていった¹²。一方、19世紀中盤、東アジア世界が西欧勢力の脅威を受けるようになり、結局通信使は1811年派遣を最後に、その後派遣されなくなった。一般的に通信使と言えば、‘朝鮮後期に朝鮮から日本に派遣された使節’という前提の下に論議が展開されている。すなわち、朝鮮後期の対日外交使節として認識され、朝鮮後期または日本の江戸時代に限定されて論議されているのである。だが、以上見てきたように、通信使は朝鮮後期にだけ派遣されたわけではなく、朝鮮時代の全期間にわたり日本に派遣された朝鮮の国王使だと言える。にもかかわらず、通信使が朝鮮後期の対日外交使節と認識されてきた理由は、朝鮮時代の通信使が日本の足利政権、豊臣政権、徳川政権の最高統治者のもとへ使わされたにもかかわらず、日本史の枠内で、中世から近世へとの変化に注目した日本の研究者たちが、徳川政権の近世的特性だけを強調した結果である。このような日本の学界の研究傾向が韓国の学界にそのまま受け入れられたきらいがないでもない。だが、対日外交において朝鮮は、前期、後期の朝日関係と外交体制を一貫したものととらえており、信義をもって隣国に対するという‘交隣政策’を一貫して施行していた。もちろん壬辰倭乱(文禄・慶長の役)を契機に相当な変化があったが、朝鮮は同一王朝の下で事大交隣という外交政策の大原則を維持し、通交体制も対日認識も基本的には同一の立場をとっていた¹³。したがって、朝鮮時代の通信使は前期と後期とを連続線上において理解すべきであろう。このように見るならば、朝鮮時代の通信使を朝鮮後期の対日通信使のみと規定してはならない。

3. 韓国における通信使研究

1960年から2002年までに発表された朝鮮時代の通信使に関連した論文著作は発表時期と研究主題別とに分けて整理すれば、下記の「表1」の通りである¹⁴。

¹² 金文植「朝鮮後期通信使行員の対日認識」『大東文化研究』41、成均館大大東文化研究所2002年、132-133頁

¹³ 河宇鳳「朝鮮後期韓日関係についての再検討」『東洋学』27-1、檀国大学東洋学研究所、1997年、365頁

¹⁴ 韓国における通信使関連の研究現況は『韓国史研究彙報』国史編纂委員会、『韓日関係史論著目録』韓日関係史学会、金東洙編『韓国史論著分類総目』、韓国史書誌検索(www.hongik.ac.kr/~khc)。韓文重「朝鮮前期の回顧と展望」、閔德基「朝鮮後期の回顧と展望」『韓日関係史研究の回顧と展望』韓日関係史学会、2002年、孫承喆「朝鮮時代通信使研究の回顧と展望」『韓日関係史研究』16、韓日関係史学会2002年等を参考にして作成したものである。

「表 1」 韓国における通信使県境の現況

	外交 体制	相互 認識	制度	記録	文学	文化 交流	経済 (貿易)	倭館	服飾	船舶	飲食	会話	計
1960			1		2								3
1970	2		2		1							1	6
1980		2	6	2	4	4			2				20
1990	6	17	13	5	12	10	1	2		1	1	3	71
2000	1	8	8	1	2	2			2		1	2	26
計	9	26	30	8	20	16	1	2	4	1	2	6	127

韓国において通信使研究に関する論文が発表され始めたのは1960年代以後のことであり、日本に比べると研究の歴史が大変短いと言えよう。以後、現在まで約120編の論文が発表され、1990年代以降その数が急増している。この表によれば、分野では制度分野が最も多く、相互認識・文学・文化交流・外交体制・記録類の順となっている。韓国での通信使研究をみると、最初は国文学研究者によって行われた。主に通信使行員たちが日本の現地で行った詩文交流及び筆談唱和等に、文学あるいは文化交流的側面からアプローチしたものが多かった。また時期的に見ると、韓日関係や交流史の研究と同様、通信使についても1960年以前の研究成果は皆無である。

また時期的に見ると、韓日関係ないし交流史の研究がそうであるように、通信使についての1960年以前の研究成果は皆無に等しいと言える実情である。このような現象は基本的には当時の韓国社会が韓国以外の他の地域に関心を向ける余裕がなかったという時代的事情に起因するものと見られる。また日帝の強占経験に対する反感だけでなく、日本と国交が漸絶した状態において‘反日政策’が持続していた時代状況等にもその原因を求めることができるだろう。だが、1960～70年代に入ってからには‘韓日修好’と‘経済開発’および‘冷戦構造’にともなう協力体制構築等の面において、国内の日本に対する関心と研究の必要性が意識され始め、特に在日韓国人研究者を中心としてなされた通信使研究が刺激となり、国内においても通信使研究を始めとする韓日関係史に対する研究が進められ始めた¹⁵。

1980年代に入り、通信使研究が本格的に開始されたのだが、その時期の特徴は相互認識、文

¹⁵ 1970年代中盤以後、日本においては通信使研究ブームが起り始めたのだが、それは李進熙・姜在彦・辛基秀を始めとする在日韓国人研究者たちの事蹟発掘と啓蒙活動によるものであり、それらにより通信使の存在が一般の日本人に認知される基盤が作られた。彼らは個別の研究や著作を通じて、通信使を朝貢使節と把握していた既存の日本の学界に反論を唱え、通信使についての正しい理解と大衆化を試み、韓国における通信使研究にも刺激を与えた。これらの研究の特徴は、大部分の研究が文化交流に焦点を合わせているという点と、日本現地に所蔵されている資料の紹介である。これは彼等の活動空間が日本であるという点と関係がなくはないだろう。参考に日本における通信使研究については、前掲 孫承喆「朝鮮時代通信使研究の回顧と展望」『韓日関係史研究』16と米谷均「日本における近世日朝関係史の回顧と展望」前掲『韓日関係史研究の回顧と展望』によく整理されている。

学、文化交流等の文化的側面についての研究が中心となっていたという点である。これは1982年の日本の‘教科書問題’に対する一つの対応策として、通信使研究において文化的な側面からのアプローチが容易であったことに起因するものと見られる。

1990年代に入ってから、多様な分野において通信使研究に対するアプローチが行なわれ、研究の量的増加もひととき著しい時期であった。その背景としては1980年代に入ってから社会一般的に反日ムードが弱まったことをはじめ、1986年のアジア大会、1988年のソウルオリンピック開催などで韓日両国の関係が友好的なものへと発展していき、日本に対する関心が高まったことを挙げることができる¹⁶。特に海外旅行の自由化により韓国社会が多様性を求めるようになり、それとともに歴史学の分野においても既存の枠から脱け出そうという努力との相乗効果で、通信使研究においても多様なアプローチが試みられたためと見られる。それは1990年代以後の国際的な冷戦構造の解体と、韓国の国際的地位の向上、経済発展と国内企業の海外進出、‘世界化(Globalization)’等の要因に力を得て表れた現象だと見られる。また、何よりも1992年の「韓日関係史学会」と1994年の「日本歴史研究会」という、対日関係専門学会の創立と学会誌の創刊により専門研究者たちがお互いに共同研究と情報交換を通じ、より組織的で体系的な研究は始めたことで、研究が活性化されたためでもあった。

1) 朝鮮前期通信使研究

朝鮮前期通信使についての研究に関しては、李鉉淙、河宇鳳、韓文鍾、金聲振、李自娟、金文子、田中敏昭などの論文がある¹⁷。これらの中でもいくつかの論文を除いては本格的な研究と言うよりも使節往来についての論文や、朝鮮後期通信使を扱う中で簡単に扱われているのが実情で、後期通信使関連論文に比べてその研究成果が極めて乏しい。したがって、通信使の初期のあり様を把握するには今後多くの研究が必要なのが実情である。まず李鉉淙は朝鮮から日本に派遣する使節を派遣目的と構成、派遣地域、往還路、使節の種別および性格、接待、使節の往来による影響などに分けて考察している。韓文鍾は朝鮮前期の対日使節派遣の実態を各王代別、名称別に

¹⁶ 李薫「韓国における韓日交流史研究の現状と課題」『日本学』20、東国大学校日本学研究所、2001年

¹⁷ 李鉉淙「朝鮮前期対倭使節派遣の種別と意義」『史学研究』17、韓国史学会、1964年。この論文は「対倭使節派遣」として『朝鮮前期対日交渉史研究』韓国研究院に収録されている。

韓文鍾「朝鮮初期李藝の対日交渉活動について」『全北史学』11・12合併号、全北大史学会、1989年

河宇鳳「朝鮮初期対日使行員日本認識」『国史館論叢』14、国史編纂委員会、1990年

韓文鍾「朝鮮前期の対馬島敬差官」『全北史学』15、全北大史学会、1992年

韓文鍾「朝鮮前期対日外交政策研究—対馬との関係を中心に—」全北大博士論文

金文子「島井宗室と1590年通信使派遣問題について」『祥明史学』2、1994年

田中敏昭「壬乱前の豊臣政権と対馬島主宗氏の朝鮮外交：總無事令を中心として」檀国大修士論文、

金聲振「朝鮮前期通信使の不傳行録について」『ムンヤン語文論集』37、ムンヤン語文学会、2000年

李自娟「朝鮮前期朝鮮通信使と日本使臣間の交易品を通して見た服飾文化研究—日本からの輸入品を中心として—」『服飾』52-4

概観し、対馬に派遣された使節(通信官、回禮使、報聘使、賜物管押使、體察使、敬差官、致尊致慰官、宣慰使(官)、垂問使)の種類と性格、任務と役割などを分析し、朝鮮と対馬との外交関係がどのように形成、展開されたのかを考察しているのだが、これらの論文は全て朝鮮から派遣した使節の種類と役割等を扱ったもので、本格的な通信使論文とは言えない。

一方、河宇鳳は対日使節団員の李藝、宋希璟、申叔舟などの日本認識を考察することで、朝鮮初期の知識人の日本観を究明している。彼はそれらの対日使節行員たちの日本認識は朝鮮の対幕府政策および対対馬政策の決定にも一定の影響を与えたとしている。その一つの例として、‘多元的な通交体制’という朝鮮前期の対日政策もまた、その結果の一つであると把握している。金聲振は朝鮮前期の通信使を中心とした朝日両国間の文学的交渉形態を概観し、現在に伝わる記録への多角的な検討を通じて『中順堂集』や『朴判事日本行録』等の不傳使行録の性格を究明している。この研究は、朝鮮後期に集中していた通信使派遣においてなされた文化交流についての研究が、朝鮮前期へとその研究領域を広げたという点において意義があると言える。李自娟は朝鮮前期の通信使と日本の使臣間の交易品中、日本からの輸入品を中心として両国間の服飾文化交流について考察している。また、金文子と田中敏昭の論文は壬辰倭乱が起きる前になされた豊臣政権の通信使派遣要請についての研究であり、壬辰倭乱の原因分析へのよい資料となっている。以上見てきたように、朝鮮前期に通信使が日本へ行ったのは五回であるにもかかわらず、研究はその内容や量的な面において後期のそれにはるかに遅れていることが分かる。したがって、通信使への正しい理解のためにはより多くの史料の発掘と多様な研究が望まれている。さらに、朝鮮政府が日本政府に派遣した使節についての研究に比べ、幕府将軍が朝鮮国王に派遣した日本国王使についての研究は李ジソンの研究が唯一のものである。したがって¹⁸、朝鮮前期通信使についての研究が本格的になされるには、日本国王使についての研究も同時になされるべきだろう。

2) 朝鮮後期通信使研究

朝鮮後期通信使についての研究は1970年代にやっと始まったのだが、李元植、李俊杰、崔博光、金鐘旭などによってであった¹⁹。だが、これらの研究は1811年の通信使や通信使の旅程等、断片的な主題を扱ったものだ。その後、1980年代に入り、通信使に対する関心が高まるにつれ、通信使の足跡を辿った金義煥の『朝鮮通信使の足跡』(1985年、正音文化社)が出版され、金龍善が翻訳した中村栄孝 外著『朝鮮通信使: 日本はわれらが育てた』(1982、東湖書館)、孫承喆が三宅英利をはじめとする日本研究者の論文を翻訳、出版した『近世韓日関係史』が出版され、はじめて通信使の全貌を照らし出そうという試みがなされた。それとともに多様な側面から通信使を照らし出す試みが行なわれ始めたのだが、文学においては金ヨンス、宋敏、蘇在英、李慧淳、朴昌基、

¹⁸ 李志善「朝鮮前期日本国王使研究」江原大学校修士論文、2002年

¹⁹ 李元植「純祖11年辛未日本通信使差遣について—対馬易地聘禮を中心として—」『史学研究』23、1973年
金鐘旭「朝鮮後期通信使点描」『国会図書館報』9・10合併号、1973年
李俊杰「日本派遣朝鮮通信使の歴史」『図書館』28-2、国会中央図書館、1973年

崔博光などによるものがある²⁰。李京子、弓民峰は「朝鮮通信使服飾の一研究」(『服飾』7、1983年)で、通信使団員たちの服飾についての研究を試み、河宇鳳は通信使関連の記録物に対するアプローチを試みている。特に1990年に入ってから、通信使を独立した主題とした著作や日本の著作の翻訳が盛んになった。李元植は文化交流の側面から通信使を検討しており²¹、孫承喆の『朝鮮時代 韓日関係史研究』(1994)、洪性徳の『17世紀朝日外交使行研究』(1998年)は対日外交体制論および国交再開交渉過程と関連させて通信使の性格を検討したものである。一方孫承喆は、通信使の一般向けの本格的な著作と言える三宅英利の『近世日朝関係史の研究』²²を翻訳し、三宅英利の他の著作『近世アジアの日本と朝鮮半島』は、趙学允と金世民、姜大徳、柳在春、嚴燦鎬などにより、それぞれ『近世日本と朝鮮通信使』(景仁文化社、1994年)と『朝鮮通信使と日本』(知性の泉、1996年)と言う題目で翻訳、出版されている。

① 対日外交体制

朝鮮の対日外交政策は、全時期にわたって‘交隣’という用語で表現されている。1990年代に入ると韓日関係史における議論は、交隣の相手あるいは範囲を拡大して朝日両国の中央政府に限らず、辺境地域まで含めるようになった。その結果、対馬及び琉球との関係を念頭においた対日外交体制についての議論が検討され始め、現在いくつかの観点と争点が提起されている段階である²³。このような論議は、交隣政策を基盤として構築された朝日関係を東アジアという国際関係の中でどのように見るのかという‘通交の枠’に関する問題であるといえよう。

外交体制に関連した研究としては、壬辰倭乱後の講和交渉の過程と回答兼刷還使についての

²⁰ 金ヨンス「朝鮮時代通信使及び随行員の服飾」『文化財』19、文化財管理局、1986年。

宋敏「朝鮮通信使の日本語体験」『語文学論叢』5、国民大学校、1986年

宋敏「朝鮮通信使の母国語体験」『語文学論叢』6、国民大学校、1987年

蘇在英「18世紀の日本体験—『日東壯遊歌』を中心として—」『論文集』18、崇実大学校、1988年

李慧淳「申維翰の『海遊録』研究」『論文集』18、崇実大学校、1988年

李慧淳『朝鮮通信使と文学』梨花女子大学校出版部、1996年

²¹ 李元植『朝鮮通信使』民音社、1991年

²² 三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、1986年。

²³ 具体的には壬辰倭乱後の国交再開の過程で試みられた対日外交政策と外交文書を素材としたものであるが、大きく二つの流れがある。一つは閔德基の説で、朝鮮後期の対日外交が中国中心の冊封体制に由来するものではなく、朝鮮前期以来の独自の対外政策にはじまるものであるとする見解である。閔によれば、朝日関係は朝鮮の周辺国及び周辺地域との間に既に存在していた‘対等’関係、または‘上下’関係を基として構築され、幕府に対しては‘敵禮的交隣’、対馬藩に対しては‘羈縻的交隣’によって対応したとするいわゆる‘交隣’の二重性を提示した。もう一つは孫承喆によって提起されたものである。孫承喆は、1403年に室町幕府の足利義満が明の冊封を受けて中国中心の東アジア秩序に編入され、朝鮮国王と幕府将軍との関係が初めて国家と国家との対等関係、言い換えれば中華の交隣関係におかれるようになり、幕府以外の通交者については羈縻的交隣に編入した二重の交隣であったというものである。朝鮮は、壬辰倭乱直後の朝日国交回復の際にもやはり中華の交隣体制を復活させようとしたが、17世紀中葉の明清交代により幕府将軍に対する明の冊封が不可能になるや、清を排除したままで模索された新たな外交関係が脱中華の交隣体制であったという見解を提示している。

研究が多くを占めている。その内、全海宗、金文子、李敏昊の論文は壬辰倭乱直後の講和交渉の過程と回答兼刷還使の派遣過程を詳細に述べている²⁴。特に金文子は朝・日・明の間に成立した三国間の交渉について言及している。また、孫承喆は回答兼刷還使から通信使へと移っていく過程を、中華的交隣体制から脱中華的交隣体制への変化と解釈しているのは注目に値する。柳在春は第1次～3次信使の日本派遣時、朝鮮国王と幕府将軍の間で交換された国書及び外交摩擦を概括し、通信使の派遣をめぐる議論された国書改竄論争において1606年の徳川家康の書契が最初から対馬において偽造されたものであるというのは誤った見解であり、この書契は偽造されたものではなく、非公式に徳川家康が送ったものを対馬で改竄したものであるという見解を示している²⁵。つまり、壬辰倭乱以後の国交再開は、朝鮮前期の多元的外交関係とは異なる性格のものであり、朝鮮国王と幕府将軍との間に成立したというものである。また、1636年、43年、55年の三度にわたり行なわれた日光山致祭についての崔鍾一の研究があるが、通信使を通じた両国の外交儀礼について多くの示唆を与えている。また、張ヨンゴルは通信使がもつ儀礼的な意味が両国の国境を越えて二つの意味－儀礼的両義性－をもっていることは明らかにしている²⁶。

② 外交使行

1990年代に入り、通信使を独立したテーマとして考察した研究が出始めた。李元植は通信使と善隣外交に関する概括的な紹介を行い、また1811年の通信使に関する研究がある。通信使の編成と路程に関する概説的な論文としては李敏昊の研究があり、張舜順の製術官に関する研究、姜信沆の訳官に関する研究論文がある²⁷。特に張舜順は、製術官が明・清に派遣された中国使行に

²⁴ 孫承喆『朝鮮時代韓日関係史研究』知性の泉、1994年

全海宗「壬辰後の対日関係」『韓国史』12、国史編纂委員会、1977年

李元植「純祖十一年日本通信使差遣について－対馬島易地聘禮と中心として－」『史学研究』23、1973年

金文子「壬辰倭乱における明・日講和交渉と朝鮮」『泗溟堂惟政』2000年

李敏昊「壬辰と韓・中・日の外交関係」『壬辰水軍活動研究論叢』海軍軍事史研究室、1993年

李敏昊「孝宗朝の対日外交」『東西史学』4、1998年

李敏昊「壬辰倭乱と対日国交再開の序幕」『ファンサン 李弘鍾博士華甲記念史学論叢』、1997年

柳在春「国交再開と国書改作事件」『近世韓日関係史』江原大学校出版部、1987年

崔金一「朝鮮通信使の日光山致祭研究」江原大学校修士論文、1998年

²⁵ 1606年の徳川家康の国書の真偽について、従来日本人学者の相当数はこの国書が徳川家康とは全く関係がなく、対馬において任意に偽造されたものであると記述している。しかし、このような主張は韓日関係史を研究する基本的な視角から見た時、問題点を内包している。なぜなら、対馬の独断による行為か否かによって当時の日本との外交の性格が全く違った立場から解釈されることになるためである。万一彼らの主張どおり対馬の独断によるものであった場合、講和交渉自体が幕府、すなわち日本の中央政権の意図でないことになるため、朝鮮が提示した条件を満たしたのは幕府ではなく対馬という意味になり、幕府の体面や名分には全く関係がないという立場になるためである。

²⁶ 張容杰「朝鮮通信使の儀礼性についての考察」『教育理論と実践』9、慶南大学校教育問題研究所、1999年

²⁷ 李敏昊「朝鮮後期の通信使行研究」檀国大学校修士論文、1984年

張舜順「朝鮮後期通信使行製述官についての一考察」『全北史学』13、1990年

は存在せず通信使派遣の際にだけみられるものであるが、これは通信使の日本滞在中に現地の文人や官吏との筆談唱和に備える任務のためであったと述べ、通信派遣の性格が初期の政治的な目的から次第に文化目的に転換していったことを強調している。姜信沆は、倭学訳官と日本通事の機能を比較、紹介している。

最近の研究傾向は、朝鮮後期の外交使行に対するアプローチの方法において既存の通信使という範疇のみに限定せず、日本国王使(大差倭;幕府の国書を所持した対馬の使行)・問慰行・年例送使・別差倭他の使行等にまで議論を拡げて比較研究する傾向が顕著である。

通信使とその他の外交使行に関連した総合的な論議としては河宇鳳、洪性徳の研究が注目される²⁸。これまでのところ制度的な検討の段階にあるが、洪性徳は壬辰倭乱以後の国交再開交渉の過程、己酉約条以後の外交使行の改編、外交使行の確立過程について17世紀の朝日関係を中心とした外交使行を全般的に検討している。彼は、通信使・問慰行・年例送事・別差倭についての分析を通じて朝鮮から日本に派遣した使行と、日本から朝鮮に派遣された使行の起源と確立過程について省察し、使行の往来に伴う朝日両国の政策変化も扱っている。あわせて朝鮮後期の日本国王使に対する検討を試みているが、この研究は朝鮮後期の日本国王使に関する唯一の論文であるといえよう。河宇鳳は、使行の往来を中心に朝鮮後期の韓日関係に対する再検討を試みた。彼はまず、朝鮮後期の韓日関係史を交隣関係の回復期、交隣体制の確立及び安定期、交隣関係の衰退期の3段階に分け、通信使と問慰行、差倭等の使行団の実状について再検討を行っている。洪性徳と李薫は、問慰行について概括的な検討を試みている²⁹。対馬が朝鮮に派遣する外交視察、いわゆる‘差倭’については、洪性徳の論文の他に、李薫が日本に漂着した朝鮮人漂流民を送還してきた対馬の使者である漂差倭の成立と渡航実態について検討し、李惠真は‘裁判差倭’

姜信沆「韓日両国訳官についての比較研究」『人文科学』23、成均館大学校人文科学研究所、1993年

姜在彦「1764年度の朝鮮通信使の日本使行について」『亞細亞文化研究』4、2000年

金瑞蘭「朝鮮後期通信使隨行倭学訳官研究」檀国大学校修士論文、1998年

小林幸夫「朝鮮通信使と民衆」『日本学年報』1991年

金聲振「1711年通信使と朝鮮の対応」『日語日文学研究』40、韓国日語日文学会、2000年

²⁸ 河宇鳳「朝鮮後期韓日関係についての再検討—使節往来を中心にして—」『東洋学』27-1、檀国大学校東洋学研究所、1991年

洪性徳「朝鮮後期問慰行について」『韓國学報』59、一志社、1990年

洪性徳「17世紀別差倭の渡來と朝日関係」『全北史学』15、1992年

洪性徳「朝鮮後期日本国王使検討」『韓日関係史研究』6、1996年

洪性徳「十七世紀朝・日外交使行研究」全北大学校博士論文、1998年

洪性徳「朝鮮後期對日外交使節問慰行の渡航人員分析」『韓日関係史研究』11、1999年

洪性徳「朝鮮後期對日外交使節問慰行研究」『国史館論叢』93、2000年

洪性徳「通信使は真偽の象徴か、朝貢の象徴か」『韓国と日本、歪曲とコンプレックスの歴史』2、白樺、1998年

仲尾宏「朝鮮朝日本通信使の意義と日韓の将来」『日本学報』2、慶尚大日本文化研究所、1995年。

申成順・李根成「朝鮮通信使」中央日報社、1994年

²⁹ ‘問慰行’とは朝鮮が倭学訳官(日本語通訳官)を正使とし、幕府とは別途に対馬に派遣する外交使行であり、日本では‘訳官使’と呼んでいる。李薫「朝鮮役官使と対馬」韓日関係学術会議要旨、韓国史学会、1991年

の成立と朝鮮の経済的対応について検討している³⁰。

通信使と関連したこれらの使行についての研究は、まだ制度的な検討の段階にあるが、これらの研究を通じて通信使の性格究明により近づくことが出来るようになった。しかし、なお依然として多くの課題が残されているのもまた事実である。例えば通信使を独立した主題として人的構成や派遣の背景、渡航の実態等、通信使自体に対する基礎的な研究が十分でない状態である。特に韓国史の中での通信使派遣と国内情勢や政治勢力との関連、経済的負担と波及効果、対中国外交との関連等、通信使の政治・外交・経済的比重を検討する研究が望まれている³¹。

③ 経済(貿易)と倭館

通信使及び朝鮮時代の韓日関係を理解する上で、経済分野は今後研究が切実に望まれる代表的な分野である。通信使が派遣されると、幕府及び一行が通過する日本の諸藩は多くの経済的被害を甘受しつつ、通信使の接待に最善を尽くしたが、通信使の接待に必要な莫大な経費は幕府や諸藩にとって大きな負担となった。それは1811年の辛巳通信使以後に通信使が中断した主要な原因が経済的負担に起因していることを見てもわかることである。

通信使と経済(貿易)に関する研究としては鄭成一の論文があるだけだが、彼はまず通信使の経済的な側面に注目し、易地聘礼が実施された1811年の辛巳通信使を中心にした通信使と貿易に焦点を合わせている。彼は通信使が朝鮮後期の対日貿易に及ぼした影響を検討する前提として、1811年の使行に参加した構成員の数と名簿、日程等を韓日両国の史料を総合して分析している³²。聘礼に参加した336名全員の名簿を分析することで、易地聘礼の実施が両国の財政緊縮という側面から、比較的成果を上げたことを明らかにし、また1811年の易地聘礼通信使断絶の原因をも究明している³³。一方、易地通信の実施が朝鮮側においては対日公貿易の慢性的な赤字を補填するのに役立つとしている。

日本側においては、通信使派遣に際しての日本国内での経費調達に関する研究が数多く行われている反面、韓国側において朝鮮政府の通信使派遣の決定と準備過程、釜山までの旅程において必要であった朝鮮側の経費調達についての研究が皆無なのが実状である。したがって、通信使の性格及びその位相をより正確に把握するためには、通信使派遣をめぐる両国の経費調達、そしてそれが国家財政に及ぼした影響等が共に論じられなければならない。したがって新たな史料の発掘と多様な研究が望まれる。

一方、倭館を独立したテーマとした研究は既に1960年代から行われていたが、1990年代に入り、朝日両国の交流の場に対する関心が高まると同時に、制度史・交渉史・地域史・生活史的な観点からアプローチした多様な研究が出てきた。その結果、倭館をめぐる韓日交流の姿が明らかになり

³⁰ 李薫「朝鮮後期対馬の漂流民送還と対日関係」『国史館論叢』26、1991年

李恵真「17世紀後半朝日外交における‘裁判差倭’成立と朝鮮の対応」梨花女子大学校修士論文、1998年

³¹ 李薫「韓国における韓日交流史研究の現状と課題」『日本学』20、151頁、2001年

³² 鄭成一「対馬島易地聘禮に参加した通信使」『湖南文化研究』20、1991年

³³ 鄭成一「易地聘禮実施前後の対日貿易動向」『経済史学』15、1991年

つつあるが、それにもかかわらず通信使と関連した研究は見られない。よく知られている通り、倭館は通信使派遣に関するあらゆる準備と実務交渉が行われた場所であり、通信使が出発し、到着する空間である。通信使と倭館についての研究は崔ヨソヒと金義煥により試みられているが³⁴、それらの研究は極めて概説的であるだけでなく、倭館の起源と変遷、草梁倭館の成立と構造を考察した研究であり、倭館に限定された研究という性格が強いため本格的な通信使関連研究とは言いがたい。通信使と関連し倭館において行なわれた朝日両国の外交交渉の形態についての研究は、通信使にたいする正しい理解への必須な要素であるにもかかわらず、依然と手つかずの分野として残されており、多くの研究が望まれる。

④ 文化交流

文化交流の分野では李元植、河宇鳳、泰俊等の研究がある³⁵。李元植は『朝鮮通信使』を通じて通信使行中に行なわれた筆談唱和について豊富な資料紹介とともに、文化交流のあり様を綿密に分析している。彼は現地調査を通じて新たな史料を発掘、収集し、『海行摠載』から抜け落ちている史料を探し出して紹介し、筆談の内容等を分類、整理している。このような彼の努力は、韓日関係史研究者たちが関連基礎資料への接近を容易にするのに大きく寄与した。また、河宇鳳は朝鮮後期の実学と日本の古学を比較しており、金泰俊は江閩筆談の分析を通じ、通信使の日本滞在中に文化交流がどのように行なわれていたのかを、事例を挙げて述べている。朴昌基は通信使と日本の学界との文化交流を考察することで³⁶、通信使が日本の思想界と文壇に及ぼした影響

³⁴ 崔永禧「朝鮮後期通信使と倭館の役割」朝鮮後期韓日関係学術会議講演会発表要旨、韓国史学会、1991年
金義煥「釜山の草梁倭館と対日通信使外交」『韓日交流史』1991年

³⁵ 李元植『朝鮮通信使』大宇学術叢書59、民音社、1991年
李元植「通信使が残した文化」『韓日交流史』1991年
李元植「通信使行と文化交流」韓・日関係学術会議での発表要旨、1991年
李元植「朝鮮通信使と韓・日文化交流」2001平和行進韓・日共同シンポジウム基調講演文、1991年
李元植「韓日善隣外交と朝鮮通信使」『史学研究』58・59合併号、韓国史学会、1999年
林性哲「朝鮮通信使往還における日本側の接待問題」『論文集』3、釜山外国語大学校、1985年
林性哲「朝鮮通信使往派遣路交渉状況の展開」『文化研究』1、釜山外国語大学校、1985年
林性哲「朝鮮通信使の路程記研究」『釜山外大論叢』5、釜山外国語大学校、1987年
河宇鳳「朝鮮後期実学と古学の比較研究試論」『韓日関係史研究』8、1998年
権五鳳「朝鮮使行を通じた日本江戸幕府の韓国儒学受容」『韓国漢文学と儒教文化』蒼谷金世漢教授停年退職記念論叢、1994年
金泰俊「18世紀韓日文学交流の様相：江閩筆談を中心にして」『論文集』崇実大学校、1988年
Ronald P. Toby(朴銀順訳)「朝鮮通信使と近世日本の庶民文化—絵画；民画；祭礼再演」『東洋学』18、檀国大東洋学研究所、1988年
申基碩「通信使の道に映った韓日交流」『韓日交流史』1991年
³⁶ 朴昌基「朝鮮時代通信使と日本の文壇—1711年使行時林家および木下順庵門との交流を中心として—」『日本学報』23、韓国日本学会、1989年
朴昌基「朝鮮時代通信使と日本荻生徠門の文化交流—1711年使行時の交流を中心として—」『日本学報』27、韓国日本学会、1991年

を考察している。一方、芳賀登は通信使が江戸時代の日本文化に及ぼした意義について強調しているのだが、これが18世紀後期に至り一部の閉鎖論者の主張により通信使の往来が途絶したものと見て、日本での国粹主義の台頭、大陸侵略の国体成立までを概観している³⁷。

⑤ 相互認識

相互認識に関する分野は1990年代に入り集中的に研究された分野である³⁸。主に通信使に参加した一行が帰国後に残した使行録を素材とした分析が多い。例を挙げると、李元植、河宇鳳、李成厚、金静日、鄭章植などの研究がそうであり、その他にも5つの修士論文があり、意欲的に研究されている分野であることが分かる。特に李元植と河宇鳳は朝鮮人の日本認識を扱っており、その

³⁷ 芳賀登「朝鮮通信使の足跡」『韓国学論集』2、漢陽大学校韓国学研究所、1982年

³⁸ 李元植「通信使記録を通じて見た対日本認識」『国史館論叢』76、1997年

河宇鳳「元重擧の日本認識」『韓国史学論叢』李基白先生古稀記念論文集、1994年

李成厚「金仁謙の歴史認識」『韓国学論叢』香山卞廷煥博士華甲記念論叢刊行委員会1992年

金静日「1636年通信使と朝鮮の対馬認識」『淑明韓国史論』創刊号、1993年

鄭章植「1636年通信使の日本認識」『韓日関係史研究』11、1999年

鄭章植「1655年通信使行と日本研究」『日本学報』44、韓国日本学会、1998年

鄭章植「癸未(1643年)通信使行と日本認識」『日本文化学報』10、2001年

鄭章植「1636年通信使の日本認識」『文明淵旨』22、韓国文明学会、2001年

鄭章植「壬戌使行と朝日関係」『日本学報』47、韓国日本学会、2001年

鄭章植「1711年通信使と朝鮮の対応」『日語日文学研究』40、韓国日語日文学会、2002年

金聲振「朝鮮後期通信使の紀行詩文にあらわれた日本観研究」『陶南学報』、1996年

金永圭「朝鮮後期の対日抗禮外交と対馬東藩意識—通信使行録を中心として—」ソウル大学校修士論文、1990年

黄昌潤「朝鮮通信使についての再検討」江原大学校修士論文、1991年

李在元「18世紀日本知識人の朝鮮認識についての考察:雨森芳洲と新井白石の朝鮮認識を中心として」慶星大学校修士論文、1995年

ペ・スヨン「趙殿の『海笑日記』を通して見た日本認識」誠信女子大学校修士論文、1997年

金允香「18世紀申維翰の日本認識についての考察—通信使記録‘海遊録’を中心として—」梨花女子大学校修士論文、1987年

韓泰文「李彦の文学観と通信使行での世界認識」『国語国文学』34、ムンチャン語文学会、1997年

韓泰文「通信使行録に反映された対日民俗観」『艸田張瑄鎮教授定年記念国文学論叢』1995年

韓泰文「[海行摠載]所在使行録に反映された日本の通過儀禮と使行員の認識」『韓国文学論叢』26、韓国文学会、2000年

ハン・ギョル「鶴峯 金誠一の日本観」建国大学校修士論文、1999。

孫承喆「朝鮮時代日本天皇観の類型的考察」『史学研究』50、1995年

李慧淳「室鳩巢の賦三韓事蹟詩小考—18世紀文士の韓国史認識」『冠嶽語文研究』18、1993年

元載淵「朝鮮後期西洋認識の変遷と対外開放論」ソウル大学校博士論文、2000年

李成厚「金仁謙の歴史認識」『香山卞廷煥博士華甲記念 韓国学論叢』1992年

ハン・スンヒ「己亥通信使の儀式改正についての新たな検討」『韓日関係史研究』16、韓日関係史学会、2002年

金文植「朝鮮後期通信使行員の対日認識」『大東文化研究』41、成均館大学校大東文化研究所、2002年

反面、李在元は日本知識人の朝鮮人認識を扱っており、それらの論文を通じて両国人の相互認識を明確に比較することも可能である。

韓泰文は1763年の通信使行に訳官として参加した李彦涓を中心にして、三使を除いた団員たちの文学観と意識が通信使派遣に及ぼした影響について考察しており、派遣以後、委巷人をはじめとする実学者たちに対日認識の転換と近代的自覚の端緒を提供していたことを明らかにしている(1997年)。金文植はまず、朝鮮後期の対日交渉の推移を概観し、『海行摠載』に収録されている日記を利用して、日本の執政者および文物に対する通信使行員の認識を検討している。鄭章植は南龍翼の使行録を分析し、通信使たちの日本に対する視角が国際情勢の変化により変わっていていることを明らかにしている(2000年)。彼は通信使が日本の繁栄を見て表面では華夷観に立ち、夷狄視しながらも、一方では日本の自然と経済力を肯定的に認識していたことは使行の成果であったと見ている。一方、孫承喆は通信使行員をはじめとする朝鮮知識人たちの天皇観を検討することで、朝鮮時代、日本天皇観がどのように変化しているのかを通時的に考察している。彼の研究によれば、朝鮮初期には天皇への関心よりは、かえって日本内の実質的な外交交渉対象である幕府將軍への関心が大きかった反面、壬辰倭乱以後の朝鮮後期では天皇の無力さに対する批判と、天皇の復権可能性に対する示唆等、天皇観に大きな変化が現れていることを明らかにしている。また、元載淵は開港期の西洋文化受容を通信使たちの西洋認識と関連させて把握している。

⑥ 文学

通信使の使行文学についての本格的な研究は1980年からだと言えよう。蘇在英、金泰俊編の『旅行と体験の文学、日本編』(民族文化文庫刊行会、1985年)が最も代表的な研究成果として挙げられており、主に通信使の使行録と、彼らが残した詩文を文学的に分析したものが大部分である³⁹。1990年代に入り、李慧淳と韓泰文、金聲振の研究が注目に値する。李慧淳と韓泰文の研究は

³⁹ 張徳順「日本紀行の日東壯遊歌」『現代文学』95、1962年

金龍基「壬辰倭乱の被擄人刷還関係新資料『海東記』考」『大邱史学』、大邱史学会、1969年

李慧淳『朝鮮通信使の文学』李大出版部、1996年

李慧淳「17世紀通信使行集團の文学と意識世界—南龍翼の「壯遊」を中心として—」『韓国漢文学研究』17、1994年

金聲振「朝鮮後期通信使の日本文学認識」『韓国文学論叢』18、1996年

金聲振「南玉の生涯、日本での筆談唱和」『韓国漢文学研究』19、韓国漢文学会、1996年

韓泰文「朝鮮後期通信使使行文学の特徴と文学史的意義」『東洋漢文学研究』10、1996年

韓泰文「甲子通信使行記『東槎録』研究」『人文論叢』50、釜山大学校、1997年

韓泰文「朝鮮後期通信使使行文学研究」釜山大学校博士論文、1995年

韓泰文「委巷文人の壬戌使行研究—東槎録」と『東槎日録』を中心として」『国語国文学』30、釜山大学校国語国文学科、1993年

韓泰文「朝鮮後期対日使行文学の実証的研究—釜山永嘉臺海神祭と祭文を中心として—」『東洋漢文学研究』11、1997年

通信使文学を本格的に分析したものであり、この分野の研究の基礎となったと言える。李彗淳は文化交流の象徴である筆談唱和集と書信への検討と分析を通じ、通信使の使行文学成立の背景と形成、各時期別の唱和集に反映されている韓日文学士の交流の特性、通信使文学の韓日文学史的意義などを考察している(1996年)。韓泰文は1990年代後半から、文学に関連する通信使関係の論文を多数発表し、朝鮮後期通信使がもっている特徴を明らかにしている。それとともに、1682年の使行(壬戌使行)に参加した二人の訳官の使行録を作者、叙述体系、叙述の態度に分けて比較し、委巷文学的特質として文化的優越感の現実的限界への認識と士大夫との葛藤を考察している(1993年)。金聲振は通信使の日本文学に対する認識等についての研究をしている。特に、宋敏は個別的な事例研究を通じ通信使行で出会った朝鮮被擄人の母国語能力についての研究を試みている。管宗次は1748年(英祖24年)の通信使行に参加した随行員朴徳源が日本に残してきた発口短冊を紹介し、通信使たちが日本滞在中に試みた外国語学習について研究を進めている。

⑦ 記録類

記録物についての研究は主に蘇在英、河宇鳳、柳鐸一、韓文鍾、孫承喆により行なわれてきている⁴⁰。朝鮮時代の通信使研究ないし韓日関係史研究において、通信使行を通じて日本を直接見聞した通信使一行の日本使行録は一次的な基本史料であることは明らかである。河宇鳳はそれらの使行録のうち、1970年代に刊行された『国訳海行摠載』に収録されていない使行録18篇を新たに発見し紹介している。韓文鍾は朝鮮時代に禮曹の典客司で編集した各種謄録類の史料性格について考察した。また孫承喆は『朝鮮王朝実録』にでてくる日本関係の記事内容を王代別に分析することで通信使を含む朝鮮後期の韓日関係史研究の基礎資料を提供している。蘇在英は『海行摠載』に収録されている使行録全体について紹介し、通信使の歴史が韓日外交史であると同時に文化交流史であるとして、使行録を通じた比較研究を進める上で民族主義的限界を超えて偏見のない研究とならなければならないことを力説している。それらの研究は通信史研究の最も基礎

韓泰文「『東槎録』所載書簡に反映された韓日文学士の交流様相研究」『韓国文学論叢』23、韓国文学会、1998年
 韓泰文「17世紀通信使使行文学の展開と文化史的意義」『人文論叢』57、釜山大学校人文学研究所、2001年
 李東燦「癸未通信使行記録のジャンル選擇:「海槎日記」と「日東壯遊歌」を中心として」『韓国文学論叢』18、1996年

宋敏「朝鮮通信使の日本語体験」『語文学論叢』5、1996年

宋敏「朝鮮通信使の母国語体験」『語文学論叢』6、1997年

管宗次「朝鮮通信使の残した発口短冊について」『日本文化学報』9、韓国日本文化学会、2000年

⁴⁰ 河宇鳳「新たに発見された日本使行録:『海行摠載』の補充について」『歴史学報』112、1986年

河宇鳳「通信使謄録の資料的性格」『韓国文化』12、1991年

蘇在英「『海行摠載』の検討」『韓日文化交流史』民文庫、1991年

韓文鍾「朝鮮後期日本についての著述の調査研究—対日関係謄録類を中心として—」『国史館論叢』86、1999年

柳鐸一「韓国古書籍日本刊行考:朝鮮朝を中心として」『韓国文学論叢』6・7合併号、韓国文学会、

孫承喆「朝鮮王朝実録日本関係記事内容分析(朝鮮後期編)」『朝鮮時代史学報』15、朝鮮時代史学会、2000年

となる史料の紹介という点において意義があると言えよう。

⑧ その他

上記の他にも通信使について多方面にわたる研究が試みられてきている。まず、通信使に随行人員として参加し、絵画を通じて文化使節としての姿を誇示することに主要な役割を果たした画員と彼等の役割についての研究がある⁴¹。また、通信使行員たちの服飾についての研究もあり⁴²、彼らに乗っていった船舶についての研究⁴³、日本での通信使接待に使用された飲食物についての研究⁴⁴等がある。これらは通信使研究の多様な側面を見せてくれるだけでなく、絵画や服飾史などの各分野の研究の一助ともなっている。

4. 通信使研究の課題と展望—むすびに代えて

以上のように韓国において行なわれてきた通信使研究の現況を整理してみた。次に、通信使研究が担うべき課題と展望を整理することでむすびに代えたいと思う。

一、通信使の名称に関する問題である。まず、名称に関する論議の提起は李元淳と河宇鳳によりなされたのだが、通信使という外交使節の名称に関する混乱が、通信使を幕府将軍の即位を祝う政治的使節(‘朝貢使節’)と見ようとする日本側の研究を無批判に受容したためだという反省が事の始まりである。通信使研究が研究者たちの意図により部分的、便宜主義的に検討され、通信使の派遣背景や名称などがまちまちであった⁴⁵。すなわち、韓日両国の多くの研究者たちが朝鮮時代に日本へ派遣された使行を‘朝鮮通信使’という名称で呼んでいるのだが、それが果たして客観的で妥当な用語であるのかという問題である。『朝鮮王朝実録』や『通信使謄録』などの関連資料を

⁴¹ 洪善杓「17・18世紀の韓・日間の絵交渉」『考古美術』143・144、1979年

洪善杓「朝鮮後期通信使随行人員の派遣と役割」『美術史学研究』205、1995年

洪善杓「朝鮮後期韓日間画蹟の研究」『美術史研究』11、1997年

洪善杓「朝鮮後期通信使随行人員の絵画活動」『美術論壇』68、1998年

金善化「朝鮮通信使の絵画交流」『東北亜文化研究』1、2001年

兪弘濬『画人列伝』12、歴史批評社、2002年

⁴² 李京子・弓民峰「朝鮮通信使服飾の一研究」『服飾』第7号、83-102、1983年

金英淑「朝鮮時代通信使及び随行人員服飾の通時的考察」『文化財』19、1986年

郭ジョンス「江戸時代の朝鮮通信使が見た京都の服飾文化」東西大学校修士論文、2002年

⁴³ 金在瑾「朝鮮後期通信使船：船型と構造」『学術院論文集』33(自然科学編)、1994年

⁴⁴ 金尚室・張哲秀「朝鮮通信使を含めた韓・日関係における飲食文化交流」『経営学研究』18-4、韓国経営学会、1999年

金尚室「朝鮮通信使を通じて見た韓日飲食文化」2002年朝鮮通信使韓日学術大会、韓日関係史学会、

⁴⁵ これについて李元淳と河宇鳳は、朝日間において政治、外交的な状況により外交使節の名称を区別して使用するべきだという名称議論を提起している(河宇鳳「朝鮮後期韓日関係に対する再検討—使節往来を中心として」『東洋学』27-1、檀国大学校東洋学研究所、1991年、李元淳「朝鮮後期(江戸時代)韓日交流の位相」『水邨朴永錫教授華甲記念韓國史学論叢』19(1991年)。

見ると、朝鮮から日本へ派遣された使臣を‘日本通信使’、‘日本国通信使’、あるいはそのまま‘通信使’と称している。使臣派遣の目的を反映し‘回禮使’‘通信官’‘報聘’‘客人護送官’等の多様な称号を使用していたとしても、日本へ送る使臣を‘日本通信使’または‘通信使’と呼ぶのが朝鮮時代の一般的な流れだったのである。また、通信使それぞれの名称に対しても朝鮮においては干支を付け加え、丁未通信使、己亥通信使などと呼んでいたし、日本においては年号を使い慶長通信使、享保通信使等を使っている。‘日本通信使’が‘朝鮮から日本に派遣する使行’だという意味ならば、‘朝鮮通信使’は‘朝鮮から来た通信使’という意味になる。すなわち、‘朝鮮通信使’は日本側の研究者たちによって使われ始めた用語であり、極めて日本史中心の用語だと言える。したがって、‘朝鮮通信使’は両国を往来した使行に対する国際的な学術用語としては不適當であり、特に韓国内においての使用は適切ではない。であるから、両国において使用できる新たな用語が求められる。

二、通信使を朝貢使と看做そうとする視角がもつ問題である。日本は江戸時代初期から通信使を内政に利用するために、暗々裏に朝貢使行だと宣伝してきた。18世紀中葉から国学が発展していき、‘日本書紀的な歴史観’が再び頭をもたげながら、通信使を朝貢使節視する傾向が一部において台頭し、それが海防論者と侵韓論者に引継がれ植民史観の一環としての位置を占めていった。第二次世界大戦以後、そうした議論は頓挫したが、最近一部の研究者により再び提起されだしている⁴⁶。これらの主張の根拠として日本の、通信使が幕府将軍の即位を祝う目的で派遣されたという見かけだけの使命にこだわった入貢説と、通信使と同格の日本の使節(日本国王使)が朝鮮に派遣されていなかったという一方性の主張を挙げることができる。だが、そうした見解は朝鮮時代の両国間に存在した往来の実態を完全に度外視したものである。

朝鮮前期、朝鮮国王使の日本幕府への派遣は10回内外である反面、日本国王使の来聘は71回にも及び、一般通交者を合わせれば、5,000回余りに達している⁴⁷。一方、朝鮮後期に至り、前期と同様な日本国王使の派遣が行なわれなかったのは日本側の使節の上京が禁止され、朝鮮側

⁴⁶ 通信使を朝貢使と見る視角は江戸時代からあるものだという事は周知の事実である。最近の研究では荒野泰典の研究(『近世日本と東アジア』1988年)がその代表である。彼は「大君外交論を説明しながら、通信使について“日本は律令国家以来国家イデオロギーを継承し、朝鮮を‘一等下’と看做し、柳川事件以降幕府は従来の朝鮮に対する位置規定を貫徹したものと考えていた。そして、朝鮮通信使は‘入貢’またはそれに近いニュアンスを持った使節として定着するようになった”と説明している。一方三宅英利も1607年の回答兼刷還使の聘禮儀式について説明しつつ、初期には幕府の応対が極めて丁重であったが、将軍が基盤を固めた後には、御三家が接待を担当し、江戸幕府の朝鮮政策からは徐々に優遇の例が見られなくなり、朝貢儀礼化していった、と述べている(『近世日朝関係史の研究』1986年)。また今回の通信使研究整理(近世編)でも、発表文17頁の下端(最終報告書91頁)に“琉球使節は通信使と同じく1644年に日光山参詣を遂げており、将軍の權威を昂揚活動に利用されている。また、通信使の来日途絶後、異国使節の「入貢」という演出の役割は、もっぱら琉球使節が担っていた感がある”と言及することで、通信使が朝貢使であるかのような見解を示している。

⁴⁷ 最近の日本研究者たちの議論の中で、幕府将軍が朝鮮に派遣した外交使節や、日本から渡航してきた通行者の中に偽使が多数含まれていたとし、日本側の対朝鮮外交使節と通交者の一部を偽使とみなそうとする傾向がある。それに対してはより客観的で詳細な研究が望まれる。

が接待を拒否したためである。すなわち、そのような処置は朝鮮前期に日本使節の上京路が壬辰倭乱当時の侵攻路として利用されたことに対して取られた、戦争挑発に対する対応策の一環だったのである。また、幕府は対馬をして大差倭を送り、朝鮮王室の慶弔事等を問慰させたのだが、その点は朝鮮前期の日本国王使と異ならなかった。1636年以後、外交使行に関する制度改変の後、日本の外交使行は対馬が専ら担当して派遣しており、その回数は計696回に達している。それら別差倭の内、通信使と将軍の慶弔事に関する業務を担当する大差倭は102回ほど渡航している⁴⁸。その反面、日本に派遣した外交使行は通信使が12回、問慰行が54回に過ぎなかった。

三、通信使に対する時代区分の問題である。三宅英利はその著書で、大きく室町幕府期と豊臣政権期、そして徳川幕府期とに分けている。また、朝鮮後期(徳川幕府期)の通信使行については日本の幕藩体制の推移を基準として、国交再開期(1回～3回)、前期安定期(4回～7回)、改変期(8回)、後期安定期(9回～11回)、衰退期(12回)の5期に区分して把握している。それは通信使に対する最初の時代区分であるだけでなく、通信使の役割とその性格変化をよく示している。だが、それは日本の国内状況と結びつけてつくられたもので、韓国史にそのまま採用するには適切ではない面がある。したがって、通信使の変化にともなう時期区分を韓国史の展開の中で再論する必要がある。一つの例として、韓泰文は通信使の使行文学の通時的考察を試みながら、交隣体制摸索期(1607年～1624年)、交隣体制確立期(1636年～1655年)、交隣体制安定期(1682年～1764年)、交隣体制瓦解期(1811年)と区分している⁴⁹。だが、韓泰文の通信使時期区分は朝鮮後期に限定されているものであり、朝鮮前期通信使をともに含められない限界がある。

四、多様な史料の発掘と忠実な史料の利用が望まれる。各種日本使行録、奎章閣所蔵の対日関係謄録類等の諸史料があるにもかかわらず、韓国側の通信使関連史料が十分に利用されていない。また、国史編纂委員会所蔵の対馬島宗家文書も同様である。それらの史料に対する綿密な分析と検討を基に我々の立場を体系的に整理した研究が本格的になされるべきだろう⁵⁰。

五、通信使研究において、研究者の底辺拡大と偏った主題選択から抜け出すことが望まれている。「表1」にもよく表れているように主に相互認識、文化交流などへの偏りが見られ、「通信使=文化使節」という図式を作ってしまう。だが、通信使は「幕府将軍襲職」という外交儀礼を表に打ち出してはいるが、両国の外交的な諸懸案を解決する媒体でもあった。したがって、通信使に対する正しい理解を図るためには、多様な側面での研究成果が望まれている。特に、「善隣友好」の象徴であった通信使の歴史性が、主に日本人によって評価されたこと自体が歪曲と偏向への懸念を生んでいる。評価の不均衡は、即研究の不均衡に起因しているのであるから、通信使についての歴史的評価をきちんと正すためには何よりも研究者の底辺拡大が望まれる。

それとともに、主題の拡大も望まれる。すなわち、朝鮮時代の通信使が持つ様々な側面と意義を考察してみると、より深みのある総合的な研究が求められるといえよう。例えば、通信使の使行に参加

⁴⁸ 別差倭と朝鮮後期の日本国王使については洪性徳の「17世紀別差倭の渡来と韓日関係」『全北史學』151992年と「朝鮮後期日本国王使検討」『韓日関係史研究』6、1996年を参考。

⁴⁹ 韓泰文「朝鮮後期通信使使行文学研究」釜山大学校博士論文、1995年

⁵⁰ 孫承喆「朝鮮時代通信使研究の回顧と展望」『韓日関係史研究』16、2002年、58頁

することで①通信使の終末と近代性に関連する問題として、18世紀までは通信使を中心とする善隣友好関係および文化交流が強調されていたのが、突然19世紀に入り、両国関係が侵略と葛藤の構図へと変化することになった原因と過程に対する理解が求められる。すなわち、1811年の対馬易地通信以後に展開された大阪易地通信を始めとする一連の交渉過程と、朝鮮侵略論(征韓論)の台頭という日本国内の政治状況の下で、断絶されることとなった原因を究明する必要がある。さらに、朝鮮侵略論の性格についての究明がなされる時、侵略と被侵略という19世紀以後の両国関係の葛藤の構図が説明可能となるだろうし、通信使の断絶も再評価されるであろう。

さらに②朝鮮の対清使節である燕行使、日本から朝鮮に派遣された大差倭、琉球使等との多様な側面における比較(使節の派遣過程において取られた諸手続きと外交儀礼、政治的な比重、経済的な影響の差など)が要求される。③通信使の使行過程での交渉に参加した構成員についての研究も望まれる。その中でも、訳官は通信使行派遣に関連した事前の業務協議をリードしていたし、通信使派遣時には三使の日程および業務協議のための通訳および実務調整を担っていた。したがって、通信使派遣を通じた両国の外交的懸案業務を推進する過程において行なわれる訳官の機能と役割が何であったのかも究明されなければならないだろう。また、随行訳官たちの社会、経済的な背景も取り扱われるべきだろう。④通信使をめぐって、使節の派遣準備と実務交渉を行なった空間である倭館についての考察も求められる。⑤通信使として参加した一行が帰国した後に、日本で見たり経験したことが朝鮮社会の対日認識と政策決定にどれほどの影響を及ぼしたのかについての研究も望まれる。⑥両国の天下観(華夷観)と朝鮮知識人たちの日本認識についての考察も試みられるべきだろう。特に、朝鮮後期に存在していた華夷観の変化は、実学の近代性に焦点が合わせられて論議されているだけで、日本国内において展開された華夷観の変化と比較して進められた研究が見られない。したがって、通信使が両国の文化発展や華夷観等の思想的変化に及ぼした影響も合わせて議論されるべきであろう。⑦文化交流の側面についての考察において、既存の筆談唱和を通じた文化交流だけではなく、他の分野、例えば宗教、音楽、美術、舞踊、生活習俗、科学技術などにおいて行なわれた両国交流のあり様と特徴、およびそれらを通じた相互認識の変化過程の客観的な考察も必要だといえる。また、⑧通信使派遣の準備とその派遣過程において所要される経費の調達とともに、経済的側面での研究(経済的な負担とその効果)が先行しなければならないだろう。と同時に、韓国史の枠内での国内情勢と通信使派遣との関係、支配勢力との関連性、対中国外交との関連性などの検討も望まれる。だが、何よりも重要なことは、朝鮮と日本両国が演出した国際的行為であったので、通信使研究も自国中心よりは、両国史の立場から客観的で、事実即して、また相互補完的に扱われるべきであろう。

韓国内の研究目録

< 著書および翻訳書 >

- 中村栄孝 他著(金龍善 訳) 1982『朝鮮通信使;日本は我等が育てた』東湖書館
金義煥 1985 『朝鮮通信使の足跡』正音文化社
金泰俊 他編 1991『韓日文化交流史』民文庫
三宅英利(孫承喆 訳) 1991『近世韓日関係史研究』理論と実践
李元植 1991 『朝鮮通信使』大字学術叢書、民音社
三宅英利(趙学允 訳) 1994『近世日本と朝鮮通信使』景仁文化社
申成順・李根成 1994『朝鮮通信使』中央日報社
孫承喆 1994 『朝鮮時代 韓日関係史研究』知性の泉
三宅英利(金世民 訳) 1996『朝鮮通信使と日本』知性の泉
李慧淳 1996 『朝鮮通信使の文学』梨花女子大学校出版部
朴贊基 2001 『朝鮮通信使と日本近世文学』朝鮮通信使と日本近世文学、宝庫社

< 論文 >

- 張徳順 1962 「日本紀行の日東壯遊歌」『現代文学』95
李鉉淙 1964 「朝鮮前期対倭使節派遣の種別と意義」『史学研究』17、韓国史学会
(『朝鮮前期対日交渉史研究』韓国研究院、1964年に「対倭使節派遣」と改題して収録)
金龍基 1969 「壬辰倭乱の被擄人刷還關係新資料<<海東記>>考」『大邱史学』1、大邱史学会
金鐘旭 1973 「朝鮮後期通信使點描」『国会図書館報』9.10
李元植 1973 「純祖11年 辛未日本通信使差遣を中心として」『史学研究』23
李俊杰 1973 「日本派遣 朝鮮通信使の歷程」『図書館』28-2、国立中央図書館
崔博光 1973 「18世紀韓日間の漢文学交流-清泉申維翰と新井白石-」『伝統文化研究』1、明知大学校韓国伝統文化研究所
全海宗 1977 「壬乱後の対日関係」『韓国史』12、国史編纂委員会
洪善杓 1979 「17.18世紀の韓・日間絵画交流」『考古美術』143.144
鄭鉉在 1980 「朝鮮初期の敬差官について」『慶熙史学』6、7、8
芳賀登 1982 「朝鮮通信使の足跡」『韓国学論集』2、漢陽大韓国学研究所
李京子・弓民峰 1983「朝鮮通信使の服飾の一研究」『服飾』第7号、83-102頁
柳鐸一 1984 「韓国古書籍日本刊行考:朝鮮朝を中心として-」『韓国文化論叢』6、7、韓国文学会
李敏昊 1984 「朝鮮後期の通信使行研究」、檀国大学校修士論文
李元植 1985 「朝鮮通信使の遺墨-日本に残された書画を中心として」『旅行と体験の文学.日本

編』、民族文化文庫刊行会

- 林成哲 1985 「朝鮮通信使往還における日本側の接待問題」『論文集』3、釜山外国語大学校
- 林成哲 1985 「朝鮮通信使派遣路交渉状況の展開」『釜山外大文化研究』釜山外国語大学校
- 河宇鳳 1986 「新たに発見された日本使行録：『海行摠載の補充と関連して』」『歴史学報』112
- 李成厚 1986 「趙巖と金仁謙の対日観研究」『金烏工大論文集』7、金烏工科大学
- 宋敏 1986 「朝鮮通信使の日本語接触」『語文学論叢』5、国民大学校語文学研究所
- 金英淑 1986 「朝鮮時代通信使および随行員の服飾の通時的考察」『文化財』19、文化財管理局
- 宋敏 1987 「朝鮮通信使の母国語体験」『語文学論叢』6、国民大学校語文学研究所
- 金允香 1987 「18世紀申維翰の日本認識についての考察-通信使記録‘海遊録’を中心にして」
梨花女子大学校修士論文
- 林性哲 1987 「朝鮮通信使路程記研究」『釜山外大論叢』5、釜山外国語大学校
- 金静日 1988 「朝鮮後期対日交隣政策研究-1936年通信使と朝鮮の対馬認識を中心として」淑明
女子大学校修士論文
- 金泰俊 1988 「18世紀韓日文学交流の様相:江関筆談を中心として」『論文集』18、崇実大学校
- 李慧淳 1988 「申維翰の『海遊録』研究」『論文集』18、崇実大学校
- 蘇在英 1988 「18世紀の日本体験-『日東壯遊歌』を中心として-」『論文集』18、崇実大学校
- Ronald P.Toby(朴銀順訳) 1988 「朝鮮通信使と近世日本の庶民文化-絵画、民画、祭礼再現」『東
洋学』18、檀国大学東洋学研究所
- 朴昌基 1989 「朝鮮時代通信使と日本の文壇-1711年使行時林家および木下順庵門との 交流を
中心として-」『日本学報』23、韓国日本学会
- 韓文鍾 1989 「朝鮮初期李藝の対日交渉活動について」『全北史学』11.12、全北大史学会
- 河宇鳳 1989 「元重挙の和国志について」『全北史学』11.12、全北大史学会
- 金泳圭 1990 「朝鮮後期の対日抗禮外交と対馬東藩意識-通信使行録を中心にして」ソウル大学
教育大学院修士論文
- 張舜順 1990 「朝鮮後期通信使行の製述官についての一考察」『全北史学』13
- 洪性徳 1990 「朝鮮後期問慰行について」『韓国学報』59、一志社
- 金錫禧 1991 「朝鮮後期通信使について」《‘朝鮮後期韓日関係学術会議’の講演会発表要旨》、
韓日史学会
- 金義煥 1991 「釜山の草梁倭館と対日通信使外交」『韓日文化交流史』民文庫
- 小林幸夫 1991 「朝鮮通信使と民衆」『日本学年報』
- 蘇在英 1991 「『海行摠載』の検討」『韓日文化交流史』、民文庫
- 朴昌基 1991 「朝鮮時代通信使と日本荻生徂徠門の文学交流-1711年使行時の交流を中心に
-」『日本学報』27、韓国日本学会
- 辛基秀 1991 「通信使の路に映った韓日交流」『韓日文化交流史』民文庫
- 李元植 1991 「朝鮮通信使の訪日と文化交流-使行録と『筆談唱和集』を中心として」『ボサン学
報』2、ボサン学術研究所

- 李元植 1991 「通信使が残した文化」『韓日交流史』民文庫
- 李元植 1991 「通信使行と文化交流」韓・日関係学術会議発表要旨、韓国史学会、
- 李慧淳 1991 「18世紀韓日 文士交流の様相: 己亥使行時韓日 文士の「唱酬集」を中心として」『大東文化研究』26、成均館大大東文化研究所
- 李薰 1991 「朝鮮訳官使と対馬島」《朝鮮後期韓日関係史学術講演会発表要旨》、韓国史学会
- 鄭成一 1991 「対馬島易地聘禮に参加した通信使」『湖南文化研究』20
- 鄭成一 1991 「易地聘禮実施前後の対日貿易動向」『経済史学』15
- 崔永禧 1991 「朝鮮後期通信使と倭館の役割」《朝鮮後期韓日関係史学術講演会発表要旨》、韓国史学会
- 河宇鳳 1991 「通信使謄録の史料的性格」『韓国文化』12、ソウル大韓国文化研究所
- 河宇鳳 1991 「朝鮮後期韓日関係についての再検討-使節往来を中心として」『東洋学』27-1、檀国大学校東洋学研究所
- 黄昌潤 1991 「朝鮮通信使認識についての再検討」江原大学校修士論文
- 李薰 1992 「朝鮮後期 対日外交文書の史料的特長」『水邨朴永錫教授華甲記念韓国史学論叢』下
- 李成厚 1992 「金仁謙の歴史認識」『韓国学論叢』香山卞廷煥博士華甲記念論叢刊行委員会
- 池斗煥 1992 「世宗代対日政策と李藝の対日活動」『韓国文化研究』5 釜山大学校
- 韓文鍾 1992 「朝鮮前期の対馬島敬差官」『全北史学』15、全北大史学会
- 金静日 1993 「1636年通信使と朝鮮の対馬島認識」『淑明韓国史論』創刊号
- 李敏昊 1993 「壬乱と韓・中・日の外交関係」『壬乱水軍活動研究論叢』海軍軍事研究室
- 姜信沆 1993 「韓日 両国訳官についての比較研究」『人文科学』23、成均館大人文学研究所
- 李薰 1993 「朝鮮後期対日外交文書-書契式の定着を中心として」『古文書研究』4、韓国古文書学会
- 金文子 1994 「島井宗室と1590年通信使派遣問題について」『祥明史学』2
- 河宇鳳 1994 「元重挙の日本認識」『韓国史学論叢』李基白先生古希記念論文集
- 河宇鳳 1994 「朝鮮後期実学と古学との比較研究試論」『韓日関係史研究』8、韓日関係史学会
- 孫承喆 1994 「朝鮮後期脱中華的交隣体制の独立性とその虚構」『国史館論叢』57
- 金在瑾 1994 「朝鮮後期通信使船: 船型と構造」『学術院論文集』33 自然科学編
- 李慧淳 1994 「17世紀通信使行集団の文学と意識世界-南龍翼の「壯遊」を中心として」『韓国漢文学研究』17
- 林熒澤 1994 「癸未通信使と実学者たちの日本観」『創作と批評』1994秋号
- 孫承喆 1995 「朝鮮時代日本天皇観の類型的考察」『史学研究』50
- 李在元 1995 「18世紀日本知識人の朝鮮認識についての一考察: 雨森芳洲と新井白石の朝鮮認識を中心として」慶尚大学校修士論文
- 金京淑 1995 「18世紀朝鮮通信使製述官および書記の文学世界; 序列の身分と文学観を通して」『温知論叢』

- 洪善杓 1995 「朝鮮後期通信使隨行画員の派遣と役割」『美術史学研究』205
- 仲尾宏 1995 「朝鮮朝日本通信使の意義と日韓の将来」『日本学報』慶尚大学校日本文化研究所
- 韓泰文 1995 「朝鮮後期通信使使行文学研究」釜山大学校博士論文
- 韓泰文 1995 「通信使行録に映った対日民俗観」『艸田張瑄鎮教授定年記念国文学論叢』
- 韓泰文 1996 「朝鮮後期通信使使行文学の特徴と文学史的意義」『東洋漢文学研究』10
- 李東燦 1996 「癸未通信使行記録のジャンル選択:「海槎日記」と「日東壯遊歌」を中心にして」『韓国文学論叢』18
- 金聲振 1996 「朝鮮後期通信使の紀行詩文にあらわれた日本観研究」『陶南学報』
- 金聲振 1996 「朝鮮後期通信使の日本文学認識」『韓国文学論叢』18
- 田中敏昭 1996 「壬乱前の豊臣政権と対馬島主宗氏の朝鮮外交:總無事令を中心として」檀国大学校修士論文
- 韓文鍾 1996 「朝鮮前期対日外交政策研究-対馬島との関係を中心として」全北大学校博士論文
- 韓泰文 1997 「甲子通信使行記『東槎録』研究」『人文論叢』50、釜山大学校
- 韓泰文 1997 「李彦瑱の文学観と通信使行における世界認識」『国語国文学』34、ムンチャン語文学会
- 韓泰文 1997 「朝鮮後期対日使行文学の実証的研究-釜山永嘉臺海神祭と祭文を中心として-」『東洋漢文学研究』11
- ペ・スヨン 1997 「趙巖の海笑日記を通じてみた日本認識」誠信女子大学校修士論文
- 李元植 1997 「通信使記録を通してみた対日本認識」『国史館論叢』76
- 金瑞蘭 1997 「朝鮮後期通信使隨行倭学訳官研究」檀国大学校修士論文
- 金尚寶・張哲秀 1999 「朝鮮通信使を含めた韓・日関係における飲食文化交流」『経営学研究』13-4、韓国経営学会
- 洪善杓 1997 「朝鮮後期韓日間の画蹟の研究」『美術史研究』11
- 洪善杓 1998 「朝鮮後期通信使隨行画員の絵画活動」『美術史論壇』6
- 洪性徳 1998 「十七世紀朝・日外交使行研究」全北大学校博士論文
- 洪性徳 1998 「通信使は信義の象徴か、朝貢の象徴か」『韓国と日本-歪曲とコンプレックスの歴史』2、白樺
- 韓泰文 1998 「『東槎録』所載書簡に映った韓日文士の交流の様相についての研究」『韓国文学論叢』23、韓国文学会
- 李敏昊 1998 「孝宗朝の対日外交」『東西史学』4
- 崔鐘一 1998 「朝鮮通信使の日光山致祭研究」江原大学校修士論文
- 洪性徳 1999 「朝鮮後期対日外交使節問慰行の渡航人員分析」『韓日関係史研究』11
- 李元植 1999 「韓日善隣外交と朝鮮通信使」『史学研究』58.19合併号（乃雲崔根泳博士定年記念論文集）、韓国史学会
- ハン・ギチョル 1999 「鶴峯 金誠一の日本観」建国大学校修士論文

- 李慧淳 1999 「室鳩巢の賦三韓事蹟詩小考-18世紀文士の韓国史認識」『冠嶽語文学研究』18
- 張龍傑 1999 「朝鮮通信使の儀礼性についての考察」『教育理論と実践』9、慶南大学校教育問題研究所
- 鄭章植 1999 「1636年通信使の日本認識」『日本文化学報』韓国日本文化学会
- 韓文鍾 1999 「朝鮮後期日本に関する著述の調査研究—対日関係謄録類を中心にして—」『国史館論叢』86
- 洪性徳 2000 「朝鮮後期対日外交使節問慰行研究」『国史館論叢』93
- 元載淵 2000 「朝鮮後期西洋認識の変遷と対外開放論」ソウル大学校博士論文
- 金文子 2000 「壬辰倭乱における明・日講和交渉と朝鮮」『泗溟堂 惟政』
- 姜在彦 2000 「1764年度の朝鮮通信使の日本使行について」『亞細亞文化研究』4
- 金聲振 2000 「1711年通信使と朝鮮の対応」『日語日文学研究』40、韓国日語日文学会
- 鄭章植 2000 「1655年通信使行と日本研究」『日本学報』44、韓国日本学会
- 管宗次 2000 「朝鮮通信使の残した発句短冊について」『日本文化学報』9、韓国日本文化学会
- 韓泰文 2000 「『海行摠載』所在の使行録に映った日本の通過儀禮と使行員の認識」『韓国文学論叢』26
- 韓泰文 2001 「17世紀通信使使行文学の展開と文学史的意義」『人文論叢』57、釜山大学校人文学研究所
- 鄭章植 2001 「1636年通信使の日本認識」『韓日関係史研究』11、韓日関係史学会
- 鄭章植 2001 「癸未(1643年)通信使行の日本認識」『日本文化学報』10、韓国日本文化学会
- 鄭章植 2001 「壬戌使行と朝日関係」『日本学報』47、韓国日本学会
- 金善化 2001 「朝鮮通信使の絵画交流」『東北亜文化研究』1、東北亜細亜文化学会
- 鄭章植 2002 「1711年通信使と朝鮮の対応」『日語日文学研究』40、韓国日語日文学会
- 郭ジョンスク 2002 「江戸時代の朝鮮通信使が見た京都の服飾文化」東西産業経営大学院修士論文
- 金文植 2002 「朝鮮後期通信使行の対日認識」『大東文化研究』41、成均館大大東文化研究所
- 金尚寶 2002 「朝鮮通信使を通して見た韓日飲食文化」2002年 朝鮮通信使韓日学術大会、韓日関係史学会
- 兪弘濬 2002 『画人列伝』12、歴史批評社
- 李自娟 2002 「朝鮮前期朝鮮通信使と日本使臣との交易品を通して見た服飾文化研究-日本からの輸入品を中心にして-」『服飾』52-4、韓国服飾学会
- チョン・ヘオク 2002 「朝鮮通信使と朝日関係」仁済大学校教育大学院修士論文
- ハン・スンヒ 2002 「己亥通信使の儀式改正についての新たな検討」『韓日関係史研究』16、韓日関係史学会
- 鄭熙鎭 2002 「朝鮮通信使の日光遊覧の文化観光学的考察」『文化観光研究』4-2、韓国文化観光協会
- 孫承喆 2003 「朝鮮時代‘通信使’概念の再検討」『朝鮮時代史学報』27、朝鮮時代史学会

小幡倫裕 2003 「申維翰の『海遊録』にあらわれた日本観とその限界」『韓日関係史研究』19